

ペイシストラトスからアンティロコスへ —ホメロスにおける教育と芸術—*

秋 山 学

序. 僭主ペイシストラトスの事績とアテナイの祝祭

古代ギリシアの詩人ホメロスの作品として伝わる二大叙事詩、すなわち『イリアス』と『オデュッセイア』は、その成立年代あるいは成立の経緯に関して、いまだに定説が確立されていない。これには、ギリシア語という言語がどの段階で文字の使用を受け入れたのか、といった文字化のプロセス、またそれに先立つ口承叙事詩の音声学的諸側面、あるいは『イリアス』『オデュッセイア』二作品の原作者として名を遺す「ホメロス」という人物が、そもそも一人であったのか複数であったのかといった問いなども関係して、非常に大きな難問となっている。この難問は総称して「ホメロス問題」と呼ばれる。

この「ホメロス問題」に関連して言及される歴史的人物に、前6世紀のアテナイに僭主として君臨したペイシストラトス（前600-527；以下、特記なき場合は紀元前）という人物がいる。「僭主」と言えば、現在では専制君主的な暴君というイメージが強いが、このペイシストラトスは、善政を敷いた名君として、後世にその名を遺す人物であった。われわれが「僭主」という名称を耳にして抱く悪しき第一印象は、主としてペイシストラトスの長男ヒッピアスが行ったペイシストラトス没後の恐怖政治に由来するものと思われる。すなわちヒッピアスは、ペイシストラトスが没したのち権力の座に就くことになるが、弟のヒッパルコスが514年、ハルモディオスとアリストゲイトンの手で暗殺されると、それ以降暴君化する。プラトンの偽作として伝えられる『ヒッパルコス』(228B)には、ホメロスのテキスト確定作業に携わったのがヒッパルコスであるとの伝承が載っている。510年にヒッピアスがアテナイから追放され、僭主政は打倒されるが、その際ヒッピアスはまずスパルタに、次いでシゲイオンに逃れる（ヘロドトス『歴史』5:96:1）。このことは、まずミレトスの支配者アリスタゴラスがイオニア諸都市を結集し、アテナイの援助を目論んでアケメネス朝ペルシアに対し反乱を企て、アテナイ市民を説得したことに関わ

る(500; 同5:97:2)。これがいわゆる「ペルシア戦争」の発端となる事件である。一方、ペルシア王ダレイオス1世の兄弟アルタフレネスはアテナイ人に対し、先のヒッピアスを受け入れるよう説得したものの、同市民はこれを拒絶する(同5:96:2)。そこでヒッピアスは、マラトンの戦(490)に際してペルシア軍を手引きする。彼はアテナイへの返り咲きを目論んでいた。マラトンの戦の前日、ヒッピアスは自らの母と同衾する夢を見る(同6:107:1)。これをヒッピアスは、自らが老いてなおアテナイに返り咲ける予兆と読んだ(同6:107:2)。当時ヒッピアスは70歳前後であったと思われるが、後日、自らの歯が抜け落ちて見つからないという不思議な経験を根拠に、マラトンの戦がペルシアの勝利に終わらないことを予知したとされる(同6:107:4)。

いま名を挙げたペイシストラトス、ヒッパルコス、ヒッピアスらを、本稿では総称して「ペイシストラトス一族」と呼ぶことにする。この一族が、ホメロス作と伝わる二大叙事詩の本文確定に大きな役割を果たしたであろうということは、いくつかの異伝を伴うとは言え、古代の文献のうちに証言を見出す。本稿はこの問題を正面から扱うものではないが、以下にその概要を示しておく。

まず、ホメロス作品の校訂・整理がペイシストラトス自身に遡るという説が、キケロ(106-43)の『弁論家論』(3.34.137)に見える。それによると、

「この時代(※古代ギリシア)において、ペイシストラトスよりも教養があり、雄弁と文学的素養において秀でていたと伝えられる人物が誰かあるだろうか？彼は、それ以前には混乱していたホメロスの諸巻を、現在(※ローマ時代)われわれが有しているような形に、初めて整理したと言われている。彼は、なるほど自らの市民たちにとって有用な人物ではなかったが、雄弁において佳麗であったと同時に、文芸と学識において卓越していたのである」。

一方上述のように、プラトンの偽作『ヒッパルコス』228BCには、同じようなホメロスの校訂作業が、ペイシストラトスの息子ヒッパルコスに遡るとの一説が挙げられている。

「ペイシストラトスの息子、ヒッパルコスは、ペイシストラトスの子供のうちで最も年長で、最も賢明であり、多くの立派な仕事にその知恵を示したが、とりわけホメロスの叙事詩をこの地に初めてもたらし、今日なお吟唱詩人たち

がそうしているように、パンアテナイアの祭の際、かわるがわる後を承けて、それを歌い通すようにさせた」。

ここには、ペイシストラトスの子供たちのうち、誰が年長者であるのかといった点も含め、他の古典作家の伝える説とは異なった伝承が遺されている。本稿ではトゥキュディデス『戦史』に従い、ヒッピアスを長子、ヒッパルコスの子としておく（1.20.2「アテナイ人たちの大半は、ペイシストラトスの子供たちの中で、ヒッピアスが最年長であるということを知らない」）。さらに上掲のキケロに従い、ホメロスの本文校訂作業に携わったのがペイシストラトス自身であったという見解を採る。これは、いま引いた偽プラトンの一節が、トゥキュディデスの見解にも合致せず、信憑性において劣ると思われるためである。もっとも、偽プラトンの記述のうちには、「今日なお吟唱詩人たちがそうしているように、パンアテナイアの祭の際、かわるがわる後を承けて、それを歌い通すようにさせた」といった、祭典の場での朗読の次第を具体的に示すような部分があり、この部分に関しては、偽プラトンが伝える伝承を重んじたいと考える。なお弁論家リュクルゴス（395-325）による『レオクラテス駁論』にもこの件に関連する一節がある（Merkelbach 1995）。

以上に記した偽プラトンの伝承をも併せつつ、ペイシストラトスの事績を再度まとめておくと、それは「アテナイの守護女神アテナの生誕を祝うパナテナイア祭を拡充し、ホメロス作として伝わる『イリアス』『オデュッセイア』二作品の完全な朗読披露が可能となるよう、その本文校訂作業を完遂した」ということになるだろう。パナテナイア祭はプルタルコス『テセウス伝』（24:3）によれば、テセウスの創始になると伝えられるが、もとよりテセウスはアテナイの神話的な英雄であり、史実性に乏しい。実際には前566年の創始であったと思われる。この祭典は、四年目ごとに行われるアッティカ最大の祭典として、ヘカトンバイオンの月の28日（8月）に挙行され、収穫期を前に、この祭の際、その年の貢租額が公示されることになっていた。またペイシストラトスは、演劇の上演を伴う大ディオニュシア祭を創始したが、これは、彼がエレウテライ（テバイの南10キロ超）のディオニュソス社をアテナイに勧進し、アクロポリスの南麓に社殿を造営したことに基づく。こうしてアッティカ劇上演の起源も彼に遡る。

ペイシストラトスがアテナイの僭主の座にあったのは、都合計三期に及ぶとされる。まず560年、クーデターにより登位して第1次の僭主期を経験（ア

リストテレス『アテナイ人の国制』14-17)、555年に第1次追放に遭った後、549年に第2回目の僭主登位を果たしている。翌548年に第2次の追放を経験するものの、538年に3回目の登位を実現させ、527年に没するまでその地位にあった。したがって彼は、三期にわたる僭主としての時期に、パナテナイア祭を拡充してホメロスの朗誦を制度化したものと思われる。また劇詩人テスピスがデビューしたのは534年のことだとされるが、これは彼による僭主としての3回目の支配の時期に当たる。

アリストテレスの『アテナイ人の国制』(16:7)によれば、「ペイシストラトスはその政治において、その他の点でも決して大衆を悩ますことなく常に平和を促し静謐を維持した。そこで人々はしばしばペイシストラトスの僭主政治は正にクロノスの時代の生活であると評判した」(村川1980:37)とされる。これが、彼が名君であったと伝えられる所以である。

ペイシストラトスが527年に没すると、長子ヒッピアスがその位を継ぐ。しかし514年夏の大パナテナイア祭当日、同性愛の痴情のもつれが原因となり、右腕とたのみ弟ヒッパルコスが反対派に暗殺される。するとヒッピアスは復讐と猜疑の念にかられて文字通り暴君となり、僭主政治は恐怖政治と化したのである(橋場2022:33)。

1) 「僭主ペイシストラトス」と「もてなしのペイシストラトス」

さて、本稿でここまで名を挙げてきた「ペイシストラトス」とは、歴史的に実在したアテナイの僭主のことである。けれども『オデュッセイア』の第3巻以降には、ペイシストラトスという同名の人物が登場する。この人物は、『オデュッセイア』の中で、主人公オデュッセウスの一人息子であるテレマコスが、トロイア戦争が終わっても郷里イタケ島に帰国しない父親の消息を尋ねて本土のピュロスへと渡った際に、終始このテレマコスの傍らにあって彼を「もてなす」存在である(以降本稿では、僭主ペイシストラトスと区別するために、『オデュッセイア』に登場するペイシストラトスを「もてなしのペイシストラトス」と呼ぶことにする)。この「もてなしのペイシストラトス」は、ピュロスの老将ネストルの末子であり、父親のネストルはオデュッセウスよりも早く、トロイア遠征から故郷ピュロスに帰国している。テレマコスとペイシストラトスはほぼ同世代の若者で、ペイシストラトスはテレマコスと同様、トロイア戦争に関して未経験である。

この『オデュッセイア』第3巻以降に登場するペイシストラトスをめぐって、岩波文庫版訳注（松平1992上：340）は、これを「ネストルの末子」であろう、としつつも、『イリアス』にもヘシオドス『名婦の列伝』（断片35）にもその名はない、として、ヘロドトス『歴史』第5巻に言及する。その言及によれば、ヘロドトスには、アテナイの僭主ペイシストラトスはネレウス家の血統を引く家柄で、僭主ペイシストラトスの父はネストルの子の名を取って命名したと記されている（5:65:4）。だがこのヘロドトスの見解とは逆に、『オデュッセイア』の中のペイシストラトスなる人物は、『オデュッセイア』のために創作されたのであって、ホメロスの詩の校訂を行った僭主の名にちなんでこの名が取られたのではないかと推測する研究者もある（ステファニィ・ウェストの注）という。松平注はさらに、もしそうであれば、『オデュッセイア』が現在の形になったのは、前6世紀のアテナイにおいてであったということになりそうである、と付記している。

本稿では、松平注において「ウェストの見解」として紹介されている「僭主ペイシストラトスによる、もてなしのペイシストラトス挿入説」を主張することまでは控えたい。ただ、『オデュッセイア』が現在の形になったのは前6世紀のアテナイにおいてであった」という見解は、上掲した僭主ペイシストラトスによるテキスト校訂作業の規模・意味・役割を、最大限にクローズアップするものだと言える。このように、ホメロス作品の成立を前6世紀ごろにまで下げる見解は、久保正彰氏の説であることがよく知られている（川島1991：259-260、久保1992：3-35）。ピндаロス（522-442）による合唱隊祝勝歌を参照しても明らかなことであるが、古代ギリシアでは、自らの家系の伝承に関する意識が万民に共通のものであったと考えられる（秋山2019）。したがって僭主ペイシストラトスは、アテナイ市民に対する政治姿勢を、『オデュッセイア』中に登場する「もてなしのペイシストラトス」像を通じ、ホメロス作品の朗誦という形態において、十全なかたちで明らかにしようとした、ということは確かに言えるであろう。

ところで『オデュッセイア』については、上述のように「ペイシストラトス」という名が作中に現れるがゆえに、ペイシストラトス一族とホメロス作品の関係を直接的に論じることが可能であり、ペイシストラトス一族による編集ないし加筆の可能性にまで、研究者の推測は及び得る。彼らペイシストラトス一族は、当然のことながら『イリアス』編纂にも関わったはずである。けれども『オデュッセイア』に登場するネストルの末子ペイシストラトスは、『イリアス』

には現れない（「もてなしのペイストラトス」は、トロイアに遠征していない）。この点も手伝って、『イリアス』に関するペイストラトス一族によるテキスト整備関連の議論（ないし推測）は、『オデュッセイア』における議論に比して、かなり形式的なものに留まっているように思える。だがわれわれが、ここからさらに議論ないし推測を展開する可能性は拓かれてこないのだろうか。

本稿はこの点を手がかりに、『イリアス』におけるアンティロコス（ペイストラトスの実兄；戦死者）の像に焦点を当てて考察を行い、『イリアス』『オデュッセイア』二作品の特質に論及しようとする試みである。

2) 『オデュッセイア』におけるネストルの一族

『オデュッセイア』第3巻は、ペロポネソス半島西岸南部の港町・ピュロスにテレマコスが到着した場面から始まる。このときピュロスの領主であるネストルは、一族を挙げて、ポセイドンに奉納する祭を挙行しているところであった。女神アテナは、メントルの姿を取ってテレマコスに指示を与えるが、このテレマコスとメントルの二人の客人をまず出迎えるのが「もてなしのペイストラトス」である。ペイストラトスは「まずポセイダオン神に祈りを捧げましょう」（γ43）と二人を誘う。

このシーンの意味について、注釈者たちは特に注記を施していない。簡にして要を得たスタンフォードの注釈書も、ポセイドンと馬信仰の関連性について言及するのみである（Stanford 1959: vol.1, 249）。しかしながら、ピュロスに居を構えるネストルの一族は、遡ればネレウス（Νηλεύς）に至り、さらに神話の上で、ネレウスはポセイドンとテュロの子である。ネレウスの末子がネストルであり、ネストルの末子がペイストラトスという系譜になる。すなわちこの『オデュッセイア』第3巻の冒頭場面は、ネストルの一族がポセイドンに遡るという由縁を明示した部分として捉えることができる。

ネストルの祖先に関する詳細は、『オデュッセイア』第11巻「冥界下り」まで読み進むなら、オデュッセウス自身の口からその次第が明らかにされる。ネレウス（λ254）の母はテュロ（λ235）、父親はポセイドンであり、ネレウスの妻はクロリスで（λ281）、ネレウスとクロリスの間にネストルが生まれる（λ286）。またネストルの妻は、第3巻に登場するエウリュディケ（γ452）である。

ところで、先に触れたヘシオドス（『名婦の列伝』；断片 35）によれば、ネストルの妻はアナクシビエ（35:14）、息子たちは順にアンティロコス（:10）、トラシュメデス（:10）、ペルセウス（:11）、ストラティオス（:11）、アレトス（:11）、エケフロン（:11）、娘はペイシディケ（:12；高津 1960：225 によればエウリュディケとも呼ばれる。ただし『オデュッセイア』でエウリュディケはネストルの妻である；γ452）とポリュカステ（:13）である。息子たちのうちアンティロコスとトラシュメデスは戦士としてトロイア戦争に参加した。そしてアンティロコスは同戦争にて戦死したが、トラシュメデスは戦争から帰還し『オデュッセイア』にも登場する（γ39, 414, 442, 448）。また娘のうち、ポリュカステは『オデュッセイア』第 3 巻に登場し、テレマコスに風呂を使わせるなど、その世話をしている（γ464）。ただ、確かにペイシストラトスはヘシオドス『名婦の列伝』には現れない。ネストルの息子たちの順は、『オデュッセイア』と『名婦の列伝』とで若干相違が見られ、『オデュッセイア』では、ネストル（とエウリュディケ）の子は「エケフロン、ストラティオス、ペルセウス、アレトス、トラシュメデス、6 番目にペイシストラトス」（γ413-415；cf. 439-444）とされている。戦死したアンティロコスは、このような『オデュッセイア』におけるピュロスの情景描写のうちには、当然のことながら現れない。

こうして『オデュッセイア』には、アンティロコスを除くネストルの息子たちが生きた姿で登場するのであるが、亡きアンティロコスも、ネストルや（もてなしの）ペイシストラトスあるいはオデュッセウス自身らによって思い起こされ、言及される（γ112 [ネストルによる言及]、δ187, 202 [ペイシストラトスによる想起]、λ468 [オデュッセウスによる言及・彼との邂逅]、ω16, 78 [求婚者の亡霊たちによる第 2 ネキュイア（冥界降り）での彼との邂逅]）。まず γ112 では、父親のネストルが「わが愛しき息子、俊足の闘士」としてアンティロコスを想起するが、それはトロイアで生命を落とした勇士たち、すなわち大アイアス、アキレウス、パトロクロスとセットにしての言及である。また δ187-202 は、弟のペイシストラトスが涙ながらに亡き兄アンティロコスを思い起こすくだりであるが、そこでは「エオスの子（メモノン）が殺めた者」（δ187-8）として、「兄は俊足の闘士でした、会ったことも見たこともないのですが」（200-201）との断りの下に、ペイシストラトスが兄について言及する。さらに、第 11 巻・オデュッセウスによる冥界での邂逅の場面では、アンティロコスは先の第 3 巻における父親ネストルによる言及と同様、大アイア

ス、アキレウス、パトロクロスとひと組で登場する (λ467-469)。この状況は、最終巻第24巻における「第2ネキュイア」でのものと基本的には同じである。もっとも第24巻では、アキレウスとパトロクロスの骨と一緒に葬られている (77: “μύγδα”) のとは異なり、アンティロコスの遺骨は「別になっている」 (78: “χωρίς”) と記されていて、そこに何らかの深い意味が込められていることをうかがわせる。

3) 『イリアス』におけるアンティロコス

このように、(もてなしの) ペイシストラトスが登場する『オデュッセイア』にあっても、彼にとってのすでに亡き兄アンティロコスの姿は、父親のネストルにより、アイアス、アキレウス、パトロクロスといった名だたる英雄たちとセットで言及されることから、その死後のあり方に特別な意識が込められていることが推測される。

ちなみに後代の伝承であるが、地誌家パウサニアス (後120-180) は『ギリシア案内記』第3巻 (ラコニア篇, 19.13) の中で、「レウケ・ネソス」(白い島) において「アキレウス、オイレウスの子のアイアス、テラモンの子のアイアス、パトロクロスそしてアンティロコスに遭った」とする、南伊クロトンの戦士レオニュモスの話を載せている。この「白い島」はドナウ川河口付近の黒海にある (同3.19.11) とされ、アキレウスの聖域があるという。このレオニュモスは、クロトン人とロクロイ (南伊、クロトンの南) 人の戦の際、ロクロイ人らがオイレウスの子のアイアスに庇護を祈願したため、そのアイアス (像) が配されている場所を攻撃したところ、胸を負傷し弱ったが、デルフォイに参拝したところ、女神官により先の「白い島」に送られ、当地で元気を取り戻し、帰国した、という。この挿話は第3巻19.9より始まるテラプネ (ラコニアの村落) に関連する一節のうちに含まれている。先に引いた合唱祝勝歌詩人ピンダロスの『ネメア祝勝歌』第4 (49) にも似た表現が認められ、「アキレウスは、黒海の輝ける島で暮らしている」とされている。

なおペイシストラトスとアンティロコスにとっての兄弟であるトラシュメデスは、生きてトロイアから帰還し『オデュッセイア』ではγ39, 414, 442, 448に登場するが、『イリアス』ではI81, K255, E10, Π321, P378, P705に現れる。『イリアス』後半では特に、アンティロコスとともに現れる印象が著しい。アンティロコスは、『イリアス』の中で主としてパトロクロスの悲報を

アキレウスにもたらす役割を帯びるのに対し、「俊足の」アンティロコスがこうして伝令に遣わされて不在になる間、トラシュメデスは兄に代わりピュロス勢を率いることになる（P705）。以下、『イリアス』におけるアンティロコスの描写に関して概括しておくことにしよう。

Δ457（アンティロコス、第一に槍を放ってエケポロスを討ち取る）。

E565, 570（メネラオスとともにアエネアスを威嚇、戦友の屍が奪われるのを防止）、580, 584, 589（メネラオスとともに、ヘクトルに駆逐されるまで奮戦）。

Z32（アガ멤ノンと並んで奮戦、自らは槍でアプレロスを討ち取る）。

N93（船陣脇の戦に現れる）、396, 400（槍で奮戦、馬を駆る）、418（トロイア方デイフォボスに憤るが死者への勤めは欠かさない）、479（アエネアスに立ち向かうイドメネウスに仲間らと加勢）、545, 550, 554, 565（トオンを討ち、アダマスに狙われるが、ポセイドン〔554-555〕の庇護の下、命を失わない）。

E513（奮戦；大アイアス、アンティロコス、メリオネス、テウクロス、メネラオス、小アイアスの順で登場）。

O568, 569, 579, 582, 585（メネラオスの激励に呼応して奮戦、メラニッポスを討つが、ヘクトルの防戦の前に自陣へと帰還）。

Π318, 320,（弟のトラシュメデスとともに、サルペドンに仕えるトロイア方の二勇士を討つ）。

P378（アンティロコスとトラシュメデスの二人はパトロクロスの死を知らず、仲間らから離れて戦う）、653（ギリシア軍の敗勢濃く、大アイアスがメネラオスに対し、パトロクロスの訃報をアキレウスに伝えるようアンティロコスに命じさせようとする）、681-3（まだ生きているネストルの子がメネラオスの目に入る）、685, 694, 704（アンティロコスは、御者ラオドコスに自らの武具を預け、アキレウスの許にパトロクロスの悲報をもたらすべく走る；ピュロス勢はトラシュメデスが代わって助勢）。

Σ2, (16), 32（船傍にあってパトロクロスの身を案じているアキレウスに、悲報を伝える；Σ18-21には、その知らせを簡潔にまとめた四行がある）。

以上、敗勢濃いギリシア方の現状を前に、アンティロコスは、パトロクロスの悲報をアキレウスに伝えるという重要な任務を果たす。これはすなわち、彼

がその「俊足」ゆえに帯びた任務だと言える。また注目に値するのは、第13巻においてアダマスに狙われるものの、アンティロコスにはポセイドンの加護があり、倒れることがないというくだりである。これは『オデュッセイア』第3巻において、父親のネストルが一族を挙げてポセイドンのための祭りを執り行っていたことを思い起こさせる。アンティロコスはさらに、『イリアス』における以下のくだりで、パトロクロスのための葬礼競技に参加し、競技の戦果を挙げる姿で描かれる。

Ψ【戦車競技に参加】301, 306, 354, 402, 419, 423, 425, 426, 429, 439, 514, 522, 541, 556, 558, 567, 570, 576, 581, 586, 602, 612.

【徒競走に参加】756, 785, 795.

この『イリアス』第23巻、すなわちパトロクロスのための葬礼競技(Ψ257-897)の次第を、アンティロコスの活躍を含めて総括的に見てみることにしよう。

1. 戦車競技 (262-652).

父ネストルが子アンティロコスに忠告を与える(306-348):ここに「智慮」(μῆτις; 313)という語彙が用いられている点に注目したい。アンティロコスは俊足をもって聞こえるが、彼が乗る馬は鈍足なため、アンティロコスには策略が必要だというわけである。これを承けてアンティロコスは馬に言葉をかける(403-416)。彼が策を弄して競技していることに気づいたメネラオスは怒るが(439-441)、アンティロコスは策略の甲斐あって第2位となる(515)。第2位をエウメロスが受けそうになったため、その行方をめぐってアンティロコスが異論を唱えるが(543-554)、その途上、アキレウスがアンティロコスに親しみを見せる(555-556)。メネラオスがアンティロコスに対し怒りを露わにしたため(566-585)、アンティロコスから申し開きが行われて、メネラオスへの和解案が提示される(587-595)。このくだりでも「智慮」(590)という語彙が用いられている。メネラオスからもアンティロコスへの和解案が提示され(602-611)、一連の悶着は解決に向かう。

ここで、一旦衝突を招くものの最終的に和解に向かうアンティロコスとメネラオスの関係は(602-603)、おそらくアキレウスとアガメムノンの関係に類比的に当てはめられると思われる。そして、アンティロコスの父ネストルにも「把手の二つ付いた鍋」が賞品として与えられ(616)、ネストルの弁が続く

(626-650).

2. 拳闘競技 (653-699).

3. 角技 (700-739).

ここでは、大アイアスとオデュッセウスの格闘の次第が記されるが (708-739)、これはおそらく、アキレウスの武具をめぐる争いを予告する効果を持つと思われる。『イリアス』はこのように、『イリアス』内部には描き切れない「トロイア神話圏」のエピソードを、別の場面を借りながら暗示的かつ効果的に描き出すという手法を用いることがある (岡 1988 をも参照)。

4. 徒競走 (740-797).

アイアス、オデュッセウス、アンティロコスの三者により徒競走競技が行われる (740-796)。オデュッセウスが優勝し、アンティロコスは最下位に終わるものの、主催者アキレウスに対する讃辞 (787-792) がアキレウスの歡心を得たため、賞品であった黄金半タラントンを倍にして受け取る (751, 796)。

5. 槍投げ (798-825).

6. 砲丸投げ (826-849).

7. 弓競技 (850-883).

8. アガメムノンとアキレウスの和解 (884-897).

こうしてパトロクロスの葬礼競技を機縁に、『イリアス』冒頭よりアキレウスとアガメムノンの間にわだかまっていた「アキレウスの怒り」が完全に解消したことが示唆される。

われわれはここで改めて、トロイアの戦場において、ネストルの一族のうちから、アンティロコスがピュロス隊の総大将としての立場において、弟のトラシュメデスとともに戦陣に立ち、ポセイドンの庇護も目覚ましく大きな戦果を挙げていたことを想起しておきたい (N554-555)。

4) アンティロコスとパトロクロス

このようにポセイドンは、『イリアス』の中ではアンティロコスを庇護するとともに、アテナとともに一貫してギリシア方を支援する。印象に残るのは、第 21 巻 (284, 287) において、アテナと一緒にわがわがの櫓を飛ばしつつ、アキレウスの参戦を鼓舞するくだりであろう。またこの二神は、第 24 巻においてはヘラとともに、アキレウスがヘクトルの亡骸に凌辱を加えるのを放任する (:26)。『イリアス』『オデュッセイア』に登場するオデュッセ

ウス、あるいは『オデュッセイア』に登場するその子テレマコスが、アテナの庇護を厚く受けていることはよく知られている。これに対し、ペイシストラトスの家系に属する者たちがポセイドン信仰に篤いことは、『イリアス』『オデュッセイア』を通じて一貫する事柄である。

遡るならポセイドンは、アッティカの地をめぐるアテナと争ったことで知られる。その際には二柱の神おのおのが最良の賜物を与える約束を行い、アテナがオリーフを芽生えさせたのに対し、ポセイドンは三叉の戈によりアクロポリス山上に塩水の泉を噴き出させたという（呉 1969 下：66）。この争いはアテナの勝利に終わるのであるが、ネレウス・ネストル・そしてペイシストラトスの一族はピュロスにゆかりを有し、また神話系譜の上で、ネレウスは既述のようにポセイドンとテュロの子である。ペイシストラトスの一族は、アテナへの祭祀を整備することでアテナイの発展の祈願を全うするとともに、ゆかりの地ピュロスに関わってポセイドンのための祭祀を『オデュッセイア』上に遺す一方、『イリアス』におけるアンティロコス譚の充実を図ることで、ポセイドンに対する崇敬を伝えたと言えるかもしれない。その背後には、アテナイとアッティカの地をめぐる、アテナに敗れたポセイドンの憤懣を晴らそうという意図をも読みぬくことが可能であろう。

さて、これまでにも示唆してきたように、アンティロコスはパトロクロスに次いでアキレウスと親しい関係にあった。アンティロコスがパトロクロスの訃報をアキレウスにもたらすという任務を帯びたのは、その俊足ゆえであったとは言え、むしろアキレウスがパトロクロスと親しかったのに次いで、彼がアキレウスと親しかったがための役柄だと言えよう。ただ『オデュッセイア』の注釈書には、「『イリアス』でアンティロコスは補助的な役割のみを与えられていて、パトロクロスの訃報をアキレウスにもたらすことに主要な役割が設定されている」（Russo-Galliano-Heubeck 1992：361）と記されていて、これは本稿での立場からすれば、十分な注記だとは言えまい。アンティロコスはネストルの亡き息子であり、ペイシストラトスからすれば亡き兄だからである。そのアンティロコスは、アキレウスを通じ、アキレウスによって仇討ちをされる（してもらう；パトロクロスの場合にはヘクトルが討たれ、アンティロコスの場合にはエオスの子メムノンが討たれる）。この意味において、アンティロコスはパトロクロスと同じ立場の存在となる。普通、アキレウスとパトロクロスの友情関係に主眼が置かれる『イリアス』にあって、ホメロス作品と、ネストルを

含めたペイシストラトス一族との密な関係が明らかになった以上、アンティロコスと、パトロクロスおよびアキレウスの関係がクローズアップされるなら、ペイシストラトス一族から『イリアス』へ、という道のりが次第に明らかになってくるであろう。

5) 「冥界」・エリュシオン・「幸福者の島」

ところで、アキレウスとパトロクロス、そしてアンティロコスは、いずれもトロイアの地で命を落としたわけであるが、先に少しく言及した「白い島」の伝承をも含め、死後彼らが滞在している場所に関しては共通している。『イリアス』にはその言及はないものの、オデュッセウスが『オデュッセイア』第11巻における「告白」の中で報告する「冥界」(467-469)、同じく第24巻「第2ネキュイア」の中で求婚者たちの霊が赴く「冥界」(76-79)がそれである。さらに後の伝承として、上掲の「白い島」が挙げられよう。

これら「冥界」ないし「白い島」と、共通点を有しながら若干異なった印象を与える場所として、「エリュシオン」および「幸福者の島」がある。まず前者「エリュシオン」に関してあるが、これは『オデュッセイア』第4巻で語られるメネラオスの話の中に登場する。テレマコスはイタケ島からピュロスに上陸し、ネストルの歓待を受ける。もっともネストルが「スパルタ王メネラオスは、最近帰国された」、「彼はありのままのことをお話しになられよう」(γ318, 327)と言って、テレマコスにスパルタ行きを勧めたため、これに従ってテレマコスはピュロスからスパルタへ、父親の情報を求めての探索を続ける。この旅では、ネストルの子ペイシストラトスがテレマコスの案内役を勤める。

スパルタで彼らは、帰国したヘレネそしてメネラオス王の歓待を受ける。テレマコスの求めに応じたメネラオスは、エジプトに漂流した際、海神プロテウスから耳にしたギリシア方諸武将の命運について語る(δ492-592)。その中で海神は、オデュッセウスを「カリュプソの屋敷で見かけた」(δ556-557)とだけ述べていた。こうしてオデュッセウスについては「死んではない」ということだけしか判らないが、話の中途、メネラオスは海神から伝えられた自らの行く末を明らかにする。それは死後、自分は「エリュシオン」に導かれるであろう、というものであった(δ563-564)。この「エリュシオン」には、すでに金髪のラダマンテウス王がいる(564)とされ、その島の情景は次のように明らかにされている。

“οὐ νιφετός, οὔτ’ ἄρ χειμῶν πολὺς οὔτε ποτ’ ὄμβρος,
 ἀλλ’ αἰεὶ Ζεφύροιο λιγὴ πνεῖοντος ἀήτας
 Ἰκεανὸς ἀνίησιν ἀναψύχειν ἀνθρώπους” (δ566-568)

「(そこは) 雪も激しい嵐もなく、大雨もなく、気持ちよく吹く
 西風のそよぎを常に大洋 (オケアノス) が送り、人々を生き返らせるとい
 う」

このように「ラダマンテウス王」が統治し、大海が優しい風を運ぶ国として
 思い浮かぶ類例に、「幸福者の島」がある。この「幸福者の島」は、後にプラ
 トンの著作 (『ゴルギアス』 524A, 『メノン』 81BC) にも見えるが、比較的早
 い時期の文献の一つとして、ピンダロス『オリュンピア祝勝歌』第2 (70-83)
 を挙げる事ができる。同歌によれば、この「至福者たちの島」にはオケアノ
 スの娘たちの風が吹く (:72)。住民たちは「ゼウスの道を進んでクロノスの
 塔に向かった」者たちであり (:70-71)、ラダマンテウスについては「レアの
 夫神 (クロノス) が傍らに御座をしつらえ迎えた」とされる (:76-8)。前後
 を含めて引くなら、

「その祝福の島にはオケアノスの娘たち (ἰκεανίδες) の風がそよ吹き、
 地上に誇る麗しき樹木の花も、水の面を飾る花も、花びらは
 黄金の炎、彼らは手に手に花を摘み、くさをを編んで冠を織る、
 ラダマンテウスの正しき考えによって」(久保 1958 : 65, 一部改変 : 71-75
 行)

とされる。その地の住民としては、ラダマンテウスのほかに「ペレウス、カ
 ドモス」 (:78) そして「アキレウス」 (:79) の名が挙がっている。ヘシオド
 ス『仕事と日』(166-73) その他にも、この「幸福者の島」の描写がある。

以上から、ピンダロスほかに歌われる「幸福者の島」と、『オデュッセイア』
 の中でメネラオスによって示される「エリュシオン」は、同一の実体を指して
 いると理解できよう。それはラダマンテウス王が登場する点から明白であろう
 が、この島には、ピンダロスによればアキレウスも移された、とのことであっ
 た (:79)。アキレウスは、『オデュッセイア』第11巻では「冥界」において、
 オデュッセウスがアガメムノンや大アイアスらとともに出逢う人物の一人であ
 る (:468)。ただ同じく『オデュッセイア』第24巻の「第2ネキュイア」に
 おける記述も含め、冥界の住民としては、アキレウスの霊 (:15)、パトロク

ロスの霊 (:16), 大アイアの霊 (:17), アガメムノンの霊 (:20) ほかとともに, アンティロコスの霊も挙がるのである (λ468, ω16, 78).

以上を整理しておこう。『オデュッセイア』にあっては, アキレウスは冥界の住民である。しかしながらまず, アキレウスは後に「幸福者の島」に移されたという伝承を持つ (ピンダロス)。ピンダロスにおける「幸福者の島」と、『オデュッセイア』でメネラオスによって語られる「エリュシオン」とは, ラダマンテウス王が支配するという点において共通する。一方『オデュッセイア』で「冥界」として語られるものと, ピンダロスにおいて「幸福者の島」として語られるものとは, ともにアキレウスの霊がそこに見出されるという点で共通する。したがって, 『オデュッセイア』における「冥界」と, 同じく『オデュッセイア』において語られる「エリュシオン」とは, 結局同種の間を指すという展開を辿るものと考えられよう。「エリュシオン」は, 「幸福者の島」とラダマンテウスその他の面で共通する性格を持つ場であるから, 結局『オデュッセイア』で「冥界」の住民とされていた人々のうち, ピンダロスにおいて「幸福者の島」に移されているアキレウスは, 『オデュッセイア』の冥界で彼とともにいることが確認されたパトロクロス, アンティロコスとともに, (後世)「幸福者の島」に住む, とされることになると考えて, 何ら不都合はないだろう。先に引いたパウサニアスが伝える伝承「白い島」は, まさしくこの方向性を実証していた。当地の住民は「アキレウス, オイレウスの子のアイアス, テラモンの子のアイアス, パトロクロスそしてアンティロコス」だったのである。

6) 「智慮」をめぐって

以上「幸福者の島」あるいは「エリュシオン」についての考察を進めてきたが, 本稿での推察が間違っていなければ, ネストルの子で戦死者なるアンティロコスも, アキレウスやパトロクロスと同様, 「幸福者の島」ないし「エリュシオン」に移される資格を備えた人物だと言えるだろう。

先に引いた『オデュッセイア』の「エリュシオン」をめぐる描写にあっては, そこは「大洋」(オケアノス)の息吹き(風)が常に吹くところ, とされていた。またピンダロスによる「幸福者の島」の描写の中では, その島にはオケアノスの娘たち(ὠκεανίδες)の風がそよ吹く, とされていた。いずれも「オケアノス」ないし「オケアノスの娘たち」の風を受ける, という表現において一致している。

ヘシオドスが主たる整理を行ったギリシア神話の体系において、「オケアノス」は、12柱のティタン族の一柱である（『神統記』133-137）。「ティタン族」とは、男神6柱、女神6柱より成る神々である（オケアノス、コイオス、クレイオス、ヒュペリオン、イアペトゥス、テイア、レイア、テミス、ムネモシュネ、フォイベ、テテュス、クロノス）。彼らティタン族は、ガイア（大地）が単独でウラノス（天空）を産んだのち、そのウラノスとの間に得た神々であり、ウラノスは彼らを大地の奥処に隠したが（同158）、末子クロノスがウラノスの専制を打破して兄弟たちを救い出すことに成功する（同181）。続いてレイアがクロノスとの間にヘスティア、デメテル、ヘラ、ハデス、ポセイドン、ゼウスという6柱の神々を産む（同453-459）。クロノスは彼らを順に飲み込むが、レイアはゼウスを懐胎したとき、クロノスをだまして大石を飲み込ませ、ゼウスはクレタ島・イダ山中で成長し成人する。ゼウスはレイアを援け、クロノスの専制を打倒する（同501）。なおペイシストラトス一族がヘシオドスのテキスト整理にも携わったであろうことに関して、筆者はほぼ確実だと推測するものであるが（ヘシオドス断片298）、今ここで論じるだけの余裕がない。

さてティタン族の一柱であるオケアノスは、同じくティタン族の一柱であるテテュスをめとり、メティス（智慮）ほか3000人の娘たち、すなわちオケアニデスをもうける。メティスはゼウスの最初の妻となるが、メティスが懐妊するやゼウスは直ちに彼女を飲み込み、ウラノスやクロノスが被ったような、次代の者による支配の転覆を阻止する。メティスの子が月満ちたとき、ゼウスの頭部から生まれたのがアテナである。

このアテナの加護厚いのがオデュッセウスであり、その子テレマコスであることに関しては、すでに述べた。もっとも、そのアテナはメティスの娘であり、メティスは表に出現することがない女神であるから、メティスの働きを究めるためには、ギリシア語彙の用法から推測する以外に方法がない。

ここで注目したいのが、本稿第4節で先に注意を払っておいた「智慮」という語彙であり、この「智慮」の原語が「メティス」である。上に記したように、「エリュシオン」や「幸福者の島」では、オケアノスないしオケアニデスの風が絶えることなく吹く、とされていた。メティス（智慮）はオケアニデスの一柱である。一方「智慮に富んだ」（πολύμητις）という形容辞は、オデュッセウスを修飾する形容辞として、『イリアス』に18回、『オデュッセイア』に68回用いられている。『イリアス』第21巻（355）では、このπολύμητιςがヘファ

イストスを形容する語彙として用いられているが、これはホメロスの作中で唯一、オデュッセウスについてではなく、また主格ではなく属格で用いられている用例である (Richardson 1993 : 82)。

この「智慮」という語彙は、先に本稿第4節で見たように、『イリアス』ではアンティロコスに関連して用いられていた。アンティロコスについても、彼に関わる属性の一つに「智慮」を含めうるのであれば、『オデュッセイア』におけるオデュッセウスとの連続性を考えることができるだろう。そしてもとより、『イリアス』をはじめとして、ホメロス作品の中には「メティス」(智慮)に関連する語彙が無数に用いられているのである (μητιᾶν K208 = 409, Σ312, Y153, H45, O27, M17, X174; α234, ζ14 = θ9. μητίετα A508, A175, B197, Z198, H478, Θ170; ξ243, π298, υ102. μητιόεις δ227. μητίεσθαι Γ416, O349, K48, Ψ312; μ373, σ27, ι262)。

以上、『イリアス』に登場する勇士アンティロコスが、①パトロクロスに通じる性質を持つこと。②「幸福者の島」ないし「エリュシオン」の住民として十分であること。③『イリアス』の中では、「智慮」を働かせる英雄として、ある面でオデュッセウスにも通じる側面を与えられていることを確認した。もっとも、この中で②の「幸福者の島」ないし「エリュシオン」に関わる表現は、エリュシオンそのものであれ冥界であれ、『オデュッセイア』にしか現れない。もとより『オデュッセイア』において、アンティロコスはすでに故人なのである。この点に注目するなら、『オデュッセイア』と『イリアス』が根本的に次元を異にする作品であるということが、自ずと明らかになってくるであろう。今この点に着目しつつ、本稿での最終的な考察に入ることにしよう。

7) 教育の書『オデュッセイア』と鎮魂の書『イリアス』

『オデュッセイア』は、その冒頭より主人公オデュッセウスが前面に現れるという構成を採ってはいない。『オデュッセイア』の第1巻より第4巻までは「テレマキア」とよばれ、すでに記したようにオデュッセウスの息子テレマコスが、イタケ島からピュロスへ、さらにはメネラオスの居城であるスパルタへと、ネストルの末子ペイシストラトスの案内によって旅をする場面の描写である。この文脈のうちに、少年から若者に向けての「教育」がある、と喝破したのは、名著『パイディア』を著したウェルナー・イエーガー (1888-1971) であった。

『オデュッセイア』第11巻「冥界降り」は、オデュッセウス自身の「一人語り」（第9巻～第12巻）のうちに含まれる構造となっている。この第11巻では、オデュッセウスが、①盲目の預言者テイレシアス、そしてオデュッセウス自身の②母親アンティクレイアと邂逅した後、神話上、③ギリシア各地の英雄たちの祖となった女性たち、続いて④トロイア戦争（ないし帰国後）に散った戦友たちと、冥界において遭遇した次第が、オデュッセウス自身の口から語られる。これをオデュッセウスの「告白」と呼んでおくことにしたい（秋山1994）。冥界でのこの「口頭による神話系譜の再整理」は、第13巻以降において、『オデュッセイア』前半では混沌として希望がなかったオデュッセウスの帰郷の可能性を、一挙に拓く端緒となる。テレマコスに対する教育の書としての「テレマキア」と併せ、オデュッセウスが自身にとっての未来を自分で切り開く「告白」の諸巻もまた、『オデュッセイア』の持つ教育性を明らかにするものだと言える。

『オデュッセイア』はしたがって、常に何か自らよりも上位の存在・困難な問題があることを前提に、自らの前に立ちはだかる難問を解決するための方策・手段を示してくれる書であると言える。その意味で、この詩篇は「教育の書」であり、いま述べた「何か自らよりも上位の存在」に当たるものの一つが、まさしく『イリアス』であると考えて差し支えないだろう。

これに対して『イリアス』は、すでに戦場に散った多くの英雄たちが、戦場で飛翔していたときの姿そのものを、その瞬時瞬時において捉え出し、描き出すことに徹した作品である。そこに、現時点での生者から死者へと向けられる視点が介在するなら、描写の精彩はまったく生氣のないものと墮す。死者を生者の姿において描き出すためには、思い起こす視点・遡る視点が介在してはならず、あくまでも同時点に立つことが肝要である。

かくして『イリアス』における詩人の語り口は、戦場にある勇士たちの活躍の姿を描くことのみ注がれているため、われわれ読者は、勇士たちの躍動する姿が自らの眼前に展開してゆくのに自らの身を任すことが可能となる。こうして、すでに亡き武将たちが躍動する場面だけをもって構成されることにより、『イリアス』は、亡き者たちに対する最上の鎮魂の作品として完成されている。この意味で『イリアス』は、不朽の芸術的結晶であると言える。その性格は、時間を捨象して永遠の相を映す「幸福者の島」にも似たものであろう。

このような、『イリアス』の持つ屹立した芸術的完成度を表すものこそ、「一緒に葬られた」アキレウスとパトロクロスの骨と同様ではなく、「別にされ

た」姿で葬られているアンティロコスの遺骨の姿 (ω78) なのではないだろうか。パトロクロスは『イリアス』の中でヘクトルに殺され、アキレウスは、パトロクロスの仇討ちを果たすなら自らの最期も近いという将来について、『イリアス』の中で公にされる。これに対してアンティロコスは『イリアス』において、パトロクロスの姿を思い起こさせるとは言え、終始生ける俊足の姿で登場する。彼の遺骨をめぐる記述が『オデュッセイア』に含まれる一節であることは、一見不可解かも知れない。だが教育とは説明に類するものであり、説明的な記述は、芸術作品の内部で芸術と共存することはできないのである。

結. 再びアテナイにおける祝典のテキストとしての 『イリアス』『オデュッセイア』

前節の最後に記したように、『オデュッセイア』が教育と方法論的説明の書であるとすれば、『イリアス』は芸術的完成品であり、「死」の翳りを一切削ぎ落した「生命体」そのものであると言い得るであろう。その姿を典型的に例示するものは、本稿における推論に基づくなら、意外にも、パトロクロスやアキレウスの像よりも、むしろネストルや「もてなしの」ペイシストラトスに連なる、アンティロコスの姿であった。『オデュッセイア』を読み解くカギが「もてなしの」ペイシストラトスにあったとすれば、『イリアス』を読み解くカギは、そのペイシストラトスにとっての亡き兄、「俊足の」アンティロコスのうちにあると考えられよう。アンティロコスに光を当てたこのような拙見は、本稿第1節末尾に述べたような、「もてなしのペイシストラトス」たちと「名君ペイシストラトス」の一族との関連を取り上げる議論が『オデュッセイア』に限定される傾向のあったこれまでのホメロス研究に対し、その議論をいかばかりか『イリアス』の作品解釈にまで及ぼそうとしたものであることを、最後に少しばかり強調しておきたい。『オデュッセイア』の持つ教育性・時間性と、『イリアス』の持つ芸術性・終末論的現在性とは、二つながら相まってアテナイの祝典の場を満たしたものと考えられよう。

※本稿は、2023年2月4日に行われた筑波大学公開講座「サイエンスシティの想像力—文学と科学編：第1回 古代都市国家（ポリス）と文学—ギリシア世界を手がかりに〜」の内容を拡充したものである。公開講座の実施に際してさまざまな労を惜しまれなかった本学大学院人文学学位プログラム・文学サブプログラムの馬場美佳准教授と茂野智大助教、そして当日、ズーム・ウェビナーでのオンラインによる

講義配信を聴講して下さった方々に、この場を借りて御礼申し上げたい。

【参考文献】

- 秋山学 (1994) 「アレクサンドリアのクレメンスによる古典学の変容」, 『パトリスティカー教父研究—』 創刊号, 96-121 頁, 新世社.
- 秋山学 (2019) 「典礼神話学序説」, 『古典古代学』 第 11 号, 43-82 頁, 筑波大学.
- 岡道男 (1988) 『ホメロスにおける伝統の継承と創造』, 創文社.
- 川島重成 (1991) 『『イーリアス』 ギリシア英雄叙事詩の世界』, 岩波書店.
- 久保正彰 (1983) 『『オデュッセイア』 伝説と叙事詩』, 岩波書店.
- 久保正彰 (1992) 『ギリシア・ラテン文学研究 — 叙述技法を中心に—』, 岩波書店.
- 久保正彰 (訳注) (1958) 「ピンダロス オリュムピア祝捷歌集」, 平凡社『世界名詩集大成 1 古代・中世』(呉茂一編), 61-84 頁所収.
- 呉茂一 (1969) 『ギリシア神話』(上・下), 新潮文庫.
- 高津春繁 (1960) 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 岩波書店.
- 橋場弦 (2022) 『古代ギリシアの民主政』, 岩波新書.
- 松平千秋 (訳注) (1992) 『イリアス』(上・下), 岩波文庫.
- 松平千秋 (訳注) (1994) 『オデュッセイア』(上・下), 岩波文庫.
- 村川堅太郎 (訳注) (1980) 『アリストテレス アテナイ人の国制』, 岩波文庫.
- T.W. Allen 1920, 1920, 1917, 1919: *Homeri Opera*, i³, ii³, iii², iv², Oxford.
- K.F. Ameis - C. Hentze - C. Cauer 1913: *Homers Ilias*, 8 Hefte, Leipzig.
- K.F. Ameis - C. Hentze - C. Cauer 1908-1920: *Homers Odyssee*, 8 Hefte, Leipzig.
- C.M. Bowra 1947: *Pindari Carmina cum Fragmentis*, 2nd ed. Oxford.
- A.Heubeck - A.Hoekstra 1989: *A Commentary on Homer's Odyssey: vol.II, Bks IX-XVI*, Oxford.
- C. Hude 1927: *Herodoti Historiae*, 2 vols., 3rd ed., Oxford.
- W.H.S. Jones - H.A. Ormerod 1926: *Pausanias: Description of Greece*, Bks III-V, Cambridge M.-London.
- R. Merkelbach 1995: “Die pisistratische Redaktion der homerischen Gedichte”, in: *Rheinisches Museum für Philologie* 95, 23-47.
- N. Richardson 1993: *The Iliad: A Commentary* (vol.1 VI; General Editor: G.S. Kirk), Cambridge.
- J. Russo - M. Fernandez-Galliano - A. Heubeck 1992: *A Commentary on Homer's Odyssey: vol.III, Bks XVII-XXIV*, Oxford.
- F. Solmsen - R. Merkelbach - M. L. West (edd.) 1983: *Hesiodi Theogonia, Opera et Dies, Scutum et Fragmenta Selecta*, 2nd ed., Oxford.
- W. B. Stanford 1959: *The Odyssey of Homer*, 2 vols., 2nd ed., London.
- M.M. Willcock 1995: *Pindar: Victory Odes*, Cambridge.
- G. Wissowa, W. Kroll, K. Mittelhaus, & K. Ziegler (edd.) 1893-: *RE (Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft)*, Stuttgart.